

# 生徒が作る対話的事例シナリオ（高校教科福祉）の効果検証

角谷 道生\* ・ 大日方 真史\*\*

## Effect Verification of Interactive Case Scenarios Created by Students (High School Curriculum Welfare)

KAKUTANI MICHIO and OBINATA MASAFUMI

### 要 旨

本研究では、令和4年度に筆者（角谷）の所属校で福祉を学ぶ生徒が、対話的事例シナリオを用いた授業を受講し、その後介護実習を経て、実習での体験を生徒自身で事例シナリオにするという活動を通してどのような効果があったのかを検証した。

その結果、生徒が介護実習での体験をもとに事例シナリオを作成することで、事例の出来事を中心にいる利用者さんにはどのような理由や背景があるのかを探り、利用者さんへの見方・考え方を深め広げる事例が作成できることが明らかになった。またその出来事に関する他者との対話を通し、利用者さんや介護に対する見方・考え方を深め、次の介護実習ではどのような姿勢や考えで取り組むのか探れるようになるという実践力の向上につながる効果があることがわかった。

キーワード：高校福祉、対話的事例シナリオ、介護実習、実践力

### 問題の提起

筆者（角谷）は、高等学校で教科福祉を担当しており、角谷道生（2020）や角谷・大日方真史（2021）において、観の自覚化・相対化・変容を目的とする対話的事例シナリオを用いた授業の効果について明らかにしてきた。前述の研究によって、生徒たちは事例・他者・自己との対話を通して、物事に対する自らの捉え方を問い直し、様々な可能性を考慮しながらよりよい介護のあり方について考えを深めていることがわかった。またその効果は角谷（2022）にて介護福祉士の専門的な実践力の1つである介護過程のアセスメント能力<sup>4</sup>の育成に寄与するものであることも明らかになった。さらに角谷・森脇健夫（2022）では、対話的事例シナリオを受講した生徒の内面的な変化について、コンセプトマップを用いて検証し、知識・専門性の向上、自分本位から利用者本位への変化等の視点・概念の変化がみられることを明らかにした。

このように対話的事例シナリオを用いた授業の有効

性については検証されてきているが、その活用方法については十分に検討されているとはいえない。角谷・森脇（2022）では、対話的事例シナリオを用いた授業を受講した生徒が、介護実習等での実体験をもとに事例シナリオを作成することで、実際に行った自身の行動をふりかえり、今後どのような行動をとりたいのか、どのように考えていきたいかなど、実体験から実践に即した形で、介護の見方・考え方を育む機会になり、実践力の向上につながるのではないかと述べているが、その効果については検証されていない。

対話的事例シナリオは開発されてからまだ間もないこともあり、生徒が事例シナリオを作成するという活用方法の効果について検証することは、対話的事例シナリオの活用の幅を広げるものである。

### 本研究の目的と方法

本研究では、令和4年度に筆者（角谷）の所属校で福祉を学ぶ生徒（高校2年生17名 以下：生徒）が、対話的事例シナリオを用いた授業を受講し、その後介

\* 三重県立みえ夢学園高等学校

\*\* 三重大学教育学部

護実習を経て、実習での体験を生徒自身で事例シナリオにするという活動を通して、どのような効果があったのかを明らかにすることを目的とする。

対話的事例シナリオを用いた授業構成としては、角谷(2020)の方法を引用・修正し、計10回実施した。

(図1)。なお介護実習については、対話的事例シナリオの8回目を受講した後の夏季休業中に行っている。介護実習が終了した直後には生徒に事例シナリオ作成を求めなかった理由としては、夏季休業をはさむことで対話的事例シナリオとはどのようなものだったか記憶が定かでなくなっていることを考慮したことと、教員が作成した全10回的事例シナリオを受講して、事例の作成方法について理解を深めることをねらいとしたことがある。

図1. 生徒が受講した対話的事例シナリオの概要と構造



事例シナリオの作成にあたっては、介護実習の実習施設が同じだったメンバー2~4名の計5グループで1つずつ作成することとした。作成する事例シナリオの構造としては、①介護実習の中で対応が困ったこと・とても印象深かったことを1つ取り上げ事例にし、②その対応の選択肢、③それぞれの選択肢ごとに起こりうる問題(追加の質問)、④実際の現場での対応及び自分たちが考える対応、⑤事例を作成して気づいたことを基本構造として提示し、それ以外の内容を加えるかどうか(例:利用者さんの健康状態などの利用者さんをより詳しく理解するために必要な情報)については生徒に一任した。

実習施設が同じだったメンバーごとのグループで作成することにした理由としては、取り上げる事例のもととなる出来事を、複数の認識で共有しながら作成することができ、一人で作成するよりも客観的な事例として作成しやすいことがある。また事例を作成する内容の基本構造のうち②選択肢や③追加の質問、④自分

たちが考える対応、⑤事例を作成して気づいたことなど、他者との対話を通して作成する方が、一人で作成するよりも多面的な視点から検討でき質の高いものができると思われたからである。

## 結果

2~4名のグループで計5つの事例シナリオを作成した。作成した事例シナリオの一例(グループA)と、他の4グループ(B~E)の事例のテーマ、⑤事例を作成して気づいたことの概要は次の通りである。

図2. 事例シナリオの一例(グループA)

テーマ: 歩行が不安定で、軽度の認知症がある利用者さんが居室から何度も共有スペースに出てこられる(※筆者が要約)

<p>表紙</p> <p>事例 ~ショートステイのAさん編~</p> <p>利用者さんの情報 Aさんの健康状態 軽度の認知症 ・場所、今の時刻は分かっている ・帰宅願望を口にしておりいつまでショートステイを利用するのか分かっていない状態 ・家では家事を積極的に行っていた様子 ・言われた事、言った事をすぐ忘れてしまう</p>	<p>①事例</p> <p>私の担当していた際にショートステイご利用でAさん(86・女性)が来られました。歩行にふらつきがあり、退院してすぐだったため居室で過ごしてもらうことになっていました。ですがAさんは軽度の認知症を患っており部屋に居ていただくよう何度促しても共有スペースに出てきてしまいます。</p>
<p>③追加の質問</p> <p>①部屋に戻っていただくよう促し続ける 一部屋に戻っていただけなかったら</p> <p>②何かの作業を一緒にする 一やることが終わってしまったら</p> <p>③自由にして頂く 一転倒してしまったら</p>	<p>②対応の選択肢</p> <p>みなさんならどういった対応をしますか?</p> <p>①部屋に戻っていただくよう促し続ける</p> <p>②何かの作業を一緒にする</p> <p>③自由にして頂く</p>
<p>④-1 実際の現場での対応</p> <p>Aさんの居室に私も共に入り話し相手をしました。職員さんの提案です。パズルも持っていき、どうしたら楽しんでもらえるか考え行動しました。しばらく居室にお邪魔させてもらい居室を出る前に居室にいて頂きたい理由を説明しました。ですがしばらくして出てきてしまいます。この事を職員さんに話と一緒に洗濯物を畳むことになりました。Aさんは仕事をしたいようだったのでこの様な方法に変えました。洗濯物を畳み終わった後職員さんに持っていきと利用者の居ない部屋で洗濯物を畳み再び退っていました。こうして常に私と何かをしてもらうよう対応をして転倒など事故が起きないようにしていました。</p>	<p>④-2 自分たちが考える対応</p> <p>②何かの作業を一緒にする</p> <p>一緒に洗濯物を畳みます。洗濯物を畳むことは施設のためになるので自分の役割を見つけて生きがいを見出すことができます。しかし畳み終えてしまうことがなくなりまた立ち歩く可能性があります。それを防ぐために折り紙などの工作をしていただくという方法があります。工作により手指のリハビリテーションや機能向上が期待できます。さらに作っていただいたものを飾ることにより施設内の雰囲気も明るくなります。物を作り上げることは達成感を得ることができ意欲、QOLの向上に繋がります。これらの効果が期待できるため②の対応をします。</p>
<p>⑤事例を作成して気づいたこと</p> <p>このスライドを作成する中でみんなで話し合うからこそ自分一人では見つけることのできないことに気がつくことができた。こういった気づきにより考えが広がり、今後何う実習施設で生きるのだと思った。また私達が行動の選択肢をつくって支援に一つの正解はなく色々な方向からアプローチして利用者にあつたものを見つけ出すことが大切だと気づいた。実際に実習先で職員さんが利用者に対し話す内容を変えていたり(家族のことからTVの内容にしていた)非言語コミュニケーションを駆使していた。この事や行動の選択肢を自分たちでつくり考えを深める中でこの支援をすれば良いというものはない。単純ではないと考えることができた。私達は介護過程を自らできていく際はこの学びを念頭に置き、利用者やその家族に満足して頂ける支援を展開したい。</p>	

\*各スライドの最上部にあるタイトルは、基本構造をわかりやすくするため筆者が加筆した。また紙面の都合上、内容を変えない範囲でスライドや記述を一部省略している。

表1. グループB～Eの事例のテーマ（\*筆者が要約）

グループ	事例シナリオのテーマ
B	立位が不安定なため車いすを使用している利用者さんが、車いすを使用せず立ち上がろうとする。立ち上がることを職員が止めると機嫌が悪くなり、物を投げることもある（認知症の有無は不明）
C	入浴後に自分の顔を拭くことなど、本当は自分でできるが、職員や実習生に「私ではできませんので、やってください」と言う（認知症はない）
D	軽度の認知症がある利用者さんが、自分のおやつを実習生（私）に食べようと言う
E	軽度の認知症がある利用者さんが、何度も腹痛を訴えたり、トイレに行きたいと言う

表2. グループB～Eの⑤事例を作成して気づいたことの概要

B Kさんは施設に入所してから目が遠いため自分の思っていることを行動しあきらむことができないのではないかと、まずはKさんに施設に慣れさせてもらう必要があると考えました。積極的にコミュニケーションを取り信頼関係を築いたり、レクリエーションに誘い他の利用者さんと交流する機会を増やしていきたいです。そうすることで施設が居場所になり安心感を得ることが期待できます。	C Tさんは、さみしさと不安から <b>適応機制の進行</b> が起こっていると考えられる。 ↓ Tさんが自分自身を守ろうとしている行動であることを理解する。まずは、自立支援などを中心に介助を行うのではなく <b>Tさんの心の環境を優先</b> する。それに加え、Tさんにとって施設は唯一甘えることのできる場所かもしれない。アセスメントをして（Tさんと家族の話を聞くなど）Tさんに一番あった介助を探していく必要がある。
D 嘘ではなく、その人の <b>世界観に合わせる</b> ことで利用者さんも職員（自分）も嫌な気持ちにならずに済みます。 これからは、その利用者さんの世界観を理解してからコミュニケーションを取りたいです。そのためあらかじめアセスメントシートに目を通しておきます。その際、 <b>アセスメントシートのままではないこと</b> に注意していきたいです。	E 私達はお腹の痛い人の対応を考えてみてAさんがかまってくれない、寒いなど様々な理由や職員さんや管理栄養士に相談するなどの対応方法が考えられると知った。しかし、試してみたことではないし、 <b>本当に考えた通りになるかわからない</b> ので今回調べてみたのをもとにお腹が痛い方がいたら温かいお茶などを提供したりすることを次回の自習で実践できることは試してみたい。また、他の利用者さんにも様々困っていることがあると思う。その利用者さんたちにも <b>視身になって原因を探り</b> 、理由や対応方法を考え、試していきたい。

\*紙面の都合上、内容を変えない範囲で筆者が記述内容を編集・省略している。

## 考察

ここでは、介護実習での体験を事例シナリオにするという活動を通して、どのような効果があったのかを、生徒が作成した事例シナリオや⑤事例を作成して気づいたことに記述されている内容を中心に考察する。

事例のテーマやその内容における全体の傾向としては、利用者さんとの日常的な関わりについてのものであり、過去の実習生からも聞いたことがある、よくある出来事である。またどの事例においても、どのような対応が良いのか即座に判断し兼ねるものであり、状況や利用者の個性によって対応が異なるものである。このような生徒が作成した事例と教師（筆者）が作成した事例にはいくつかの違いがある。

教師が作成した事例は、ア. 食事や入浴、睡眠、着替えなどの介護の場面を中心にしており、イ. どの知識や技術を使うのかわかりやすい（例：睡眠なら高齢者の睡眠の特徴や日中の活動量など）。ウ. その場で何をすると良いのかが明確であり定説がある（例：睡眠の場合、利用者さんに寝てもらおうこと）という構造になっている。こうした事例を通して、定説を問い直す（例：利用者さんに寝てもらおうことだけを考えるとよいのか、と問いかける）ことで、生徒が自身の介護観を

問い直し、多様な見方・考え方を持つことを通して、よりよい介護について追求する姿勢を育むことをねらいにしている。それに対し、生徒が作成した事例は、ア. 介護場面に限定されない日常の関わりであり、イ. どの知識や技術を使うのかわかりにくい。ウ. 定説といえるものがあまりなく、利用者さんの思いと施設や職員側の思いが異なり、それぞれに納得できる理由があるため、どうすると良いのかわかりにくいという構造になっている。つまり、教師が作る事例は考える道筋がある程度整っており、定説を問い直すことで、介護の見方・考え方を深め広げる傾向が強いのにに対し、生徒が作る事例は、何からどのように考えるとよいのかわからないものであり、事例の出来事を中心にいる利用者さんにはどのような理由や背景があるのかを探り、利用者さんへの見方・考え方を深め広げる傾向が強いものであるといえる。

次に、⑤事例を作成して気づいたことに記述されている内容を考察する。全体の傾向としては、生徒が本当に困った出来事を、グループメンバー（以下：他者）との対話を通して、どのような見方ができるのか、どのように考える・捉え直すことができるのかといった見方・考え方を広げ深めていることがある。前述したように、生徒が作成した事例のテーマは教師が作成する事例シナリオのテーマとは異なり、何からどのように考えるとよいのかわからないものであり、それらを専門的な知見を用いて考えることで、新たに意味づけることができたり、事例の出来事そのものだけでなく、そこに至るまでの背景に思いを寄せたり、問題の所在を明らかにしたりすることの大切さに気づき、これからどのように行動するかについて考えを深めている。

このことが顕著に表れているのが、事例シナリオの一例（グループA）である。グループAの④—2の自分たちが考える対応では、役割を持つこと、リハビリや機能向上など専門的な知識を用いて、QOL（生活の質）の向上につながる機会であるとしたうえで、⑤事例を作成して気づいたことには「みんなで話し合うからこそ自分一人では見つけることのできないことに気がつくことができた」という他者との対話の効果について書かれている。また「行動の選択肢をつくってみて支援の一つの正解はなく色々な方向からアプローチして利用者にあったものを見つけ出すことが大切だと気づいた」、「この支援をすれば良いというものはない、単純ではないと考えることができた」という利用者さんへの理解を深めることをベースに様々な介護を検討することが必要であることへの気づきが記載されている。

以上のことから生徒が介護実習での体験をもとに事例シナリオを作成することで、事例の出来事の中にある利用者さんにはどのような理由や背景があるのか

を探り、利用者さんへの見方・考え方を深め広げる事例が作成できることが明らかになった。またその出来事に関して他者との対話を通し、利用者さんや介護に対する見方・考え方を深め、次の介護実習ではどのような姿勢や考えで取り組むのかを探れるようになるという実践力の向上につながる効果があることがわかった。

## 本研究の到達点と課題

本研究では、生徒が対話的事例シナリオを用いた授業を受講し、その後介護実習を経て、実習での体験を生徒自身で事例シナリオにするという活動を通して、どのような効果があったのかを検証した。

その結果、生徒が介護実習での体験をもとに事例シナリオを作成することで、事例の出来事を中心に利用者さんにはどのような理由や背景があるのかを探り、利用者さんへの見方・考え方を深め広げる事例が作成できることが明らかになった。またその出来事に関して他者との対話を通し、利用者さんや介護に対する見方・考え方を深め、次の介護実習ではどのような姿勢や考えで取り組むのかを探れるようになるという実践力の向上につながる効果があることがわかった。

また今回生徒が作成した事例シナリオは、教師が作成した事例シナリオとは異なり、生徒が実習生として本当に困る出来事がテーマになっている。この事例シナリオは、これから介護実習を行う生徒が受講することで、実習中に遭遇すると思われる困りごとについて事前に考える機会にもなるものである。本研究では、生徒が作成した事例シナリオが生徒自身にとってどのような効果があるのかを検証したが、その効果が事例を作成した生徒だけでなく、これから介護実習を行う生徒にとっても価値のある可能性が示唆されており、対話的事例シナリオの活用方法についてはさらなる検討の余地があることがわかった。

今後の課題としては、生徒が実習での体験をもとに事例シナリオを作成したことが、その後の介護実習などの実際の現場での行動をどのように変容させるのかを明らかにするということがある。事例シナリオを作成し、実習中の困りごとについて、見方・考え方を広げ・深めたものが行動をどのように変えていくのかを明らかにできれば、実践力を育む対話的事例シナリオの一つのモデルプランを示すことができる。

この課題への追求方法として現時点で考えられるものに、実習での体験をもとに事例シナリオを作成した生徒が、次の介護実習でも同じような出来事に遭遇したか、遭遇しなかった場合や遭遇したとしてもそれを困りごとだと思わなかった場合にはその原因は何か、遭遇した場合にはどのような対応をしたか、対応の結

果や実習先の介護職員はどのような対応、もしくは考えを持っているかなどについて自由記述形式のアンケートを行い、生徒が記述するという方法がある。こうした取り組みを通して、実践力を育む対話的事例シナリオの一つのモデルプランの構築を検討していく。

## 注

<sup>i</sup> 対話的事例シナリオとは、大学における教員養成PBLの一つとして、観の自覚化・相対化・変容を目的にして山田康彦ほか(2018)が考案したものである。対話的事例シナリオの授業は、1. 事例シナリオの提示 2. 定説の提示 3. 定説に対する批判 4. 定説にかわる実践例の提示の4つの段階で構成されている。学習者はこれら4つの段階の中で、事例シナリオとの対話、教師・学習者同士の対話、自己内の対話を行い、自らの観の自覚化・相対化・変容を行っていく。角谷(2020)では、介護経験や生活経験の少ない高校生が取り組みやすいように、2. 定説の提示を選択肢の提示に変更し、3. 各選択肢に対する批判として、選択肢を選んだ生徒の意見をゆさぶるような「追加の質問」を作成・提示し、生徒が自分自身の考えを広く、深くとらえ直し、知の探究にいざなう役割を強く出すようにした。なお、授業の実際の現場でよくある対応や介護職員の実践例は、筆者の所属校の近隣にある介護施設職員に協力を依頼し、助言いただき、実施した。

<sup>ii</sup> 角谷(2022)ではアセスメント能力を「介護観や人生観等の物事の見方・考え方を土台とした、情報収集能力、問題分析能力、言語化能力、意思決定能力」としており、対話的事例シナリオを用いた授業は、アセスメント能力の土台である介護観等の物事の見方・考え方と、情報収集能力や問題分析能力等の技術の両面の育成に寄与するとしている。

## 参考文献

- 角谷道生(2020)「高校教科福祉における対話的事例シナリオを用いた授業の効果と検証」人間教育と福祉 第9号 pp.99-107
- 角谷道生・大日方真史(2021)「高校教科福祉における他校生徒とのピア・ラーニングの効果検証」三重大学教育学部研究紀要 第72巻 pp.361-368
- 角谷道生(2022)「高校教科福祉におけるアセスメント能力の育成を目指した対話的事例シナリオを用いた授業の効果と検証」人間教育と福祉 第11号 pp.105-114
- 角谷道生・森脇健夫(2022)「対話的事例シナリオ実践(高校教科福祉)における生徒の内的変容過程の検証」三重大学教育学部研究紀要 第73巻 pp. 553-559
- 山田康彦・森脇健夫・根津知佳子・赤木和重・中西康雅・大日方真史・守山紗弥加・前原祐樹・大西宏明(2018)『PBL事例シナリオ教育で教師を育てる—教育的事象の深い理解をめざした対話的教育方法—』三恵社